

しんしんと、夜道に雨が降る。

上京して七年、都会の梅雨にはいまだに慣れない。

じめっとした空気が身体にまとわりつく。気温が上がってきていることもあり不快感も増している。

雨そのものは嫌いではない。今日の様に嫌なことがあった日には、雨の音は心を落ち着けてくれる。

はあ、と男は小さくため息をついた。金曜日の帰り道だというのに気分が全く晴れない。

アパートの前の狭い通りに来ると、トラックが前から迫ってきた。幹線道路の抜け道らしく、よくトラックが狭い道を無理矢理通りに来る。

電柱の影に隠れ、通り抜けるのを待つことにした。

トラックが自分の横を通り抜ける瞬間、足に水が跳ねた。

また小さなため息をついた。

アパートの階段の隅に二匹の蛙がいた。じつとこちらを覗いている。腹でも減っているのだろうか。帰り道に買ったコンビニ弁当に目を落としたが、蛙が食べるとは思えずそのまま立ち去った。

アパートの階段を登り部屋に向かう。階段の金属板が薄いのか、足を乗せるたびに板が振動している。

202の鍵をあける。ただいまは言わない。おかえりもない。

部屋には誰もおらず、あるのは生乾きの洗濯物だけだ。

テレビをつけ、スーツを脱ぎながら夕飯の準備をする。と言っても買ってきた弁当とビールを並べるだけだ。

朝起きて仕事して夕飯はコンビニの弁当とビール。そして寝る。この繰り返し。

はあ、とまた一つため息をついた。

男はビールを飲み干してそのままテーブルで寝てしまった。

翌日、寒気がして目を覚ました。

十四時ごろだろうか。土日はいつもそのぐらいまで寝てしまう。

虚無感と共に目を開けた。

たまっている片付けでもしようか、そんなことを考えていた。しかし、目の前の光景は男の経験とは違うものだった。

自分と同じくらいの身長 of ビール缶が目の前にあった。

昨晚自分が飲んでいたものと同じだった。

周りを観察するとそこがテーブルの上ということがわかった。

男は背が縮んだ夢でも見ているのかと思ひ自分の姿を確認しようと手を見た。見慣れた手ではなかった。指は4本で水かきは大きく吸盤のようなものもある。そして男は今現在自分が四つん這いであることに気づいた。

男は自分の全身を確認しようとビールの缶に近づいた。アルミの缶に写っているのは湾曲した蛙だった。

男は蛙になっていた。
夢ではないかと思った。

こんなにはつきり夢をみていると分かるのは始めてだなと思った。蛙になった夢が話の種にでもなるだろうかと考えていると、声が頭に響いた。

『人間よ、これは夢ではない』

驚いて周りを見渡すが誰もいない。どこからか声ばかりが聞こえてくる。

『私は蛙の神。貴様は罪なき蛙を無残な死に追いやった。よって残りの生涯を蛙として過ごし、蛙の命の重みを理解させる』

蛙の命？そんなものを奪った記憶はない。何かの間違いではないだろうか。

『貴様が捨てた煙草の火で火傷を負って死んだ蛙がいる』
煙草なんぞ俺は吸わないぞ。

そういえば三ヶ月ほど前に入居した隣の住人が煙草の不始末かなんかで大家と揉めていたな。

男は蛙の神に、その蛙は可哀想だが殺したのは自分ではないと伝えた。

しかし蛙の神はだんまりだった。

『…ふむ。我々には人間の区別はつきづらいのだ』

つまりなんだと言うのだ。早く人間に戻して欲しい。

『人間に戻したいのは山々なんだが、いかんせん経験がない。少し待ってもらおうことになる』
ふざけるな、と思ったが蛙の神とやらの声はそれ以降聞こえなくなった。

俺は人間に戻れるのだろうか。それ以前にこれは夢ではないだろうか。

夢か現か分からない状況に男は困惑しながら、蛙の姿で少し跳びはねてみた。

思ったより高く跳んでしまい、テーブルから落ちてしまった。

痛みは不思議と少なかった。男はやはり夢ではないかと思った。

蛙の姿で部屋を少し跳び回った後、夢が覚めるまで寝ることにした。

目が覚めても姿は蛙のままだった。

時刻は二十二時を過ぎていた。

男は飢えと渴きを感じたが、この体でどうやって食料と水を確保すればいいか見当もつかなかった。

とりあえず部屋をぐるっと跳ね回ると、入り口の扉のすぐ横にある台所の窓が開けっぱなしなことに気がづいた。

外は風が強いらしく、そこから少し雨が入ってきている。

試しに部屋に入ってきている雨水を少し舐めてみた。決してうまいというわけではないが、喉を潤すには十分だった。

今夜は雨水でやり過ごすことにした。

ぶーんと、飛んでいたハエがひどく魅力的に見えた。

少し恐ろしく感じ、男は再び眠りについた。

日曜日の朝になっても男は蛙の姿だった。

男は雨水でしのぎながら、蛙の神が人間に戻すことを待ったが、それから半日以上経っても蛙の神が話かけてくることはなかった。

男から何度か念じるように話しかけてみたが、音沙汰はなかった。

怒りに任せて叫んでもみたがそれでも返事はなかった。

既に時刻は二十時を過ぎている。これが現実だとすれば、明日の朝までに人間に戻してもらわないと仕事に行けなくなってしまう。

男は蛙の姿でウロウロと跳び回ったが、時間ばかりが過ぎていく。

ついに何も起きないまま月曜の朝四時になっていた。

八時には出ないと会社に間に合わない。

まだ焦るような時間ではないのだろうか。しかしどうしたらいいのか皆目見当もつかない。

とりあえず会社に休みの連絡を入れたほうがいいのではと思ひ、テーブルに置いたままのスマホに触ってみると、画面はぬるぬるになるが操作はできるようだ。

よかった、一応無断欠勤にはならず済む。

しかし、このまま人間に戻れず休み続けられ、いずれクビになってしまう。俺の人生は一体どうなってしまうんだ。

蛙に似つかわしくない悩みを抱えていると、ふと思った。このまま辞めて何か問題があるのかと。

このまま蛙として過ごすのも悪くはないんじゃないかと。

両親は既にいないし、兄弟や自分を気にかけるような友人もない。

人間としてこれ以上やりたいこともない。

スマホは操作できるようだから退屈もしない。

食べ物や飲み水は多くはいらぬし、自然の恵を利用すればいいから食費もかからない。

それに、蛙の寿命の間、家賃を払うだけの貯金もある。

それならもう何もかも捨てて蛙として生きていけばいいのではないかと。

そう思うと焦りはなくなった。

近くをハエが飛んでいたので、舌を伸ばしてみた。美味かった。

それから台所に跳びのり、開けっ放しだった窓の棧に跳びのった。

そのまま部屋を一望し、外へと出てみた。

階段を軽やかにびよんびよんと跳んで降りた。

雨は降っているが心地よかった。

このままどこに行こうか。身も心も軽くなった今ならどこへでも行ける気がする。

そんなことを考えながら、弾んでアパートの前の道に出る。

ぐしゃり

男が最後に聞いた音だった。トラックは何も気づかずに走り去っていった。

：

『待たせたな、人間に戻す方法がわかったぞ。今から戻そう』

『ん…？ふむ…。トラックに轢かれてしまったか。しかし人間というのは……』

『……』

蛙の神の声は聞こえなくなった。

先ほどまで誰もいなかった202号室に一人の男があらわれた。

男は自分の姿を確認すると小さなため息をついた。

月曜の朝七時。会社に行く準備をする。

外ではしんしんと雨が降る。梅雨はまだ終わらない。